

今はもう 失われた 民の神話

立川 みどり



今はもう忘れ去られた民について

かつて、神々が地上を頻繁に歩んでいた時代、オリエントのどこかに住まう民族がいた。何という名の民であったか、記録は残されていない。彼らは、自分たちをも他の民をも等しく「人」と呼んでいた。おそらく、彼らは、自分たちを他の民族と区別して考えるということがなく、ゆえに自らを指す民族名を持たなかったのだろう。

長いときが過ぎるあいだに、彼らはいつしか歴史の狭間に消え、忘れ去られていった。ごくまれに、かの民族のことを覚えている人々は、彼らを《今はもう忘れ去られた民》という呼び名で語っている。ゆえに、彼らを仮にこの名で呼ぶことにしよう。

《今はもう忘れ去られた民》のことを、歴史の本や教科書などで読まれた方は、おそらくいないだろう。

彼らは、歴史の上に何の足跡も残さなかった。いかなる民と戦をすることもなく、いかなる民の運命をも左右することもなく、歴史時代の幕が開くまえに、散り散りになって消え去っていったからである。

そのかわり、彼らは独特の神話を残した。《今はもう忘れ去られた民》自体が、その名の通り忘れ去られても、彼らの神話は、さまざまな民族の語り部たちの口を介して、後世に伝えられたのである。その中から、星の神々と風の神々に関するおもな話をここに紹介する。

第一話 創世神話

原初の昔、宇宙は巨大な卵だった。あるとき卵がかえり、砕け散った穀の破片が宇宙にちらばった。そんな破片の一つから、太陽の神が生まれた。

ずいぶん長いあいだ、太陽の神はただひとり虚空の中に浮かんでいた。太陽の神は孤独だった。そこで、かつて宇宙卵の殻であった破片を集めて、仲間の神々を創った。水星の女神、金星の女神、大地の女神、火星の女神、知星の女神、木星の神、土星の神、天王星の神、海星の神であった。

仲間の神々がそばにいるようになって、しばしのあいだ、太陽の神は満足した。だが、すぐに物足りなくなった。

「わたしには仲間がいるが、妻がおらぬ。もし、わが傍らに妻がおれば、わたしの孤独は完全に癒されるにちがいない」

そこで太陽の神は、もっともそば近くにいた水星の女神に求婚した。

「やさしくたおやかな水星の女神よ。どうかわたしの妻になっておくれ」

だが、星の神々のなかでもっとも小柄で気弱な水星の女神は、力強い太陽の神を恐れ、妻となるのをためらって、賢い知星の女神に相談した。

「知星の女神よ、困ったことになりました。太陽の神がわたしを妻にと望むのです。けれど、わたしはあの方が恐ろしい。どう言って断わればいいのでしょうか」

「水星の女神よ、こう言いなさい。われらも太陽の神も同じ卵の殻より生まれしもの。太陽の神はいわば兄。兄と妹は結婚できぬと」

知星の女神に教えられたとおりの言いわけをして、水星の女神は太陽の神の求婚を断わった。

がっかりした太陽の神は、今度は金星の女神に求婚した。

「麗しくあでやかな金星の女神よ。どうかわたしの妻になっておくれ」

女神たちのなかでもっとも美しく浮気な金星の女神は、ただひとりの神を夫と定めることに気が進まなかった。かといって、正直にそう断わるのも恐ろしく、知星の女神に相談して、水星の女神とまったく同じ言いわけをした。

「太陽の神よ。あなたとわたしは同じ卵の殻から生まれました。あなたはわたしのお兄さま。兄と妹は結婚できませんぬ」

それから太陽の神は、大地の女神、火星の女神、知星の女神と、次々に求婚した。だが、いずれの女神も、兄と妹であることを理由に求婚を拒絶した。大地の女神は自立心の強きがゆえ、火星の女神は猛々しき気性のゆえ、知星の女神は賢明なるがゆえに、ひとりの男神の妻となることを望まなかったのである。

太陽の神の落胆ぶりを見て、知星の女神は気の毒に思い、助言した。

「わが兄たる太陽の神よ。虚無から女神をお創りなさいませ。それならあなたの妹ではありませんせぬ。虚無から生まれた女神は熱と光に焦がれ、あなたを愛することでしょう」

そこで太陽の神は、虚無から女神を創った。大気の女神であった。

知星の女神の予言どおり、大気の女神は太陽の神に惹かれ、焦がれた。だが、虚無から生まれた女神にとって、太陽の神はあまりにまぶしく熱すぎた。太陽の神に近づこうとすると、まばゆさに目がくらみ、体が燃えつきそうだった。

太陽の神に惹かれながらも同時に畏れ、大気の女神は愛しい夫の神を避けた。それを見て、木星の神や海星の神は、大気の女神が太陽の神を嫌っていると思い、求愛した。

「太陽の神が恐ろしいなら、わたしの妻にならないか」

「わたしなら、太陽の神ほど熱くはなく、まぶしくもないぞ」

木星の神と海星の神のようにはっきり口には出さずとも、土星の神、天星の神も、一抹の期待のこもった目で、消え入りそうにはかなげな大気の女神の姿を追った。

男の神々、ことに豪放な木星の神の求愛は、日ごとに露骨になり、大気の女神は恐れおののいた。かといって、太陽の神のもとに逃げこむことはできなかった。それができるぐらいなら、最初から太陽の神を避けはしない。

困りはてた大気の女神をかばったのは、大地の女神であった。

「大気の女神よ。わたしのそばにいらっしやいな。いかに木星の神といえども、わたしの友に手出しはできませんぬ」

何者にも動かしがたい強さと自立心を持つ大地の女神と、しとやかな大気の女神。ふたりの女神は気が合い、どんな姉妹も友もかなわぬほど親しくなった。そうして大地と大気は、その後つねにそばを離れず、ともにあるようになったのだった。

第二話 生き物と風の誕生

大地の女神と大気の女神は仲のよい友人だった。大地の女神には、ずっと前から考えていた計画があり、ある日、それを大気の女神に打ち明けた。

「わたしは生き物を創りたい。大地を飾る木や草や花を。大地の上を走る獣を。大地の上を飛ぶ鳥を。そして大地を愛し、大地を讃える詩を作り、わたしを崇める人間を」

「なんて素晴らしい計画でしょう。わたしにも手伝わせて下さいな」

ふたりの女神は生き物の創造に夢中になった。まず最初に創ったのは、大地を飾る草と花と木々だった。草は申しぶんのない緑。色とりどりの花々は、申しぶんのないかわいらしさ、美しさ。木々は申しぶんのない巨大さで、森や林を形作った。

だがそれなのに、草にも花にも木にも、どこかしら生彩がなかった。どうしても生きているようには見えなかった。

「いったいどこがいけないのでしょうか」

大地の女神が困惑して草や花や木をなで、大気の女神は吐息をついた。すると、大地の女神の指が触れ、大気の女神の息がかかった草や花や木は、生命を授かってかぐわしい芳香を放った。女神たちは喜び、すべての草や花や木に生命を与えた。

つぎに、女神たちは獣と鳥を創った。獣や鳥の姿に創りそこねたものは、海や川に投げうてば、魚や貝になった。虎や獅子は申しぶんなくたくましく、鹿や鶴は申しぶんなく美しく、りすや小鳥は申しぶんなくかわいらしかった。だが、獣や鳥は地の上に、魚は水の中に横たわったまま、身動きひとつしなかった。

大地の女神は草や花や木にしたのと同じように獣や鳥や魚に触れ、大気の女神は息を吹きかけた。すると、獣も鳥も魚も生命を得て心臓を脈打たせ、息をした。だが、獣は地を走らず、鳥は飛ばず、魚は泳がなかった。

「いったいどこがいけないのでしょうか」

大地の女神は悲しんで、いとしげに獣や鳥や魚を抱きしめ、大気の女神はため息をついた。するとたちまち、獣は地を走り、鳥は飛び、魚は泳いだ。そうして、すべての獣と鳥と魚が動きまわるようになった。

最後に、ふたりの女神は人間を創った。百人の男の子と百人の女の子だった。だが、いずれも地に横たわったまま、身動きひとつしなかった。

今までと同じように、大地の女神が手を触れ、大気の女神が息を吹きかけると、人間たちの心臓が動いた。大地の女神が抱きしめ、大気の女神が息を吐きかけると、人間たちは立ち上がった。だが、だれも言葉を発せず、詩を作らず、女神たちを崇める知恵を持たなかった。

「いったいどこがいけないのでしょうか」

大地の女神は嘆きの涙を流し、大気の女神は愛をこめて人間たちの額にくちづけした。すると、大地の女神の涙と大気の女神の唇に触れた人間は、言葉を発し、ものを考え、詩を作った。それで女神たちは、すべての人間に知恵を授けた。

大地の女神と大気の女神は満足し、幸福でもあった。木や草や花は女神たちのためにかぐわしい芳香を放ち、獣や鳥や魚は女神たちに甘え、人間は女神たちを崇める。生き物たちもまた幸福だった。

だが、ふたりの女神とその創造物との至福の日々は、他の神々の妬みを誘った。ことに大気の女神の夫たる太陽の神は、妻に敬遠される悲しみのゆえに、大地の女神と大地の生き物たちを妬み、憎んだ。

「大気の女神はわが最愛の妻。それなのになにゆえ、わたしを避けて、大地の女神とともにいるのか。なにゆえわたしを愛さず、草や木や花、獣や鳥や人ばかりを愛するのか」

神々にとってはつかのま、人間にとっては何世代にもわたる長いときが流れたのち、ついに太陽の神は、ふたりの女神と大地に生きる生き物たちを罰しようと決心した。

太陽の神は太陽の炎のかけらをちぎると、女神たちと生き物たちの住む大地に向かって投げつけた。草や木や花は炎に焼かれ、あるいは暑さに打ちしおれた。獣や鳥や人は、焼け死んだり、暑さのために地に倒れた。

「太陽の神よ、わが敬愛するおにいさま。あなたのなさることとは思えない。どうしてこんなひどいことをなさるのですか」

「大地の女神よ、そなたがわが妻を引き止め、わがもとに来させぬからだ」

「太陽の神よ、いとしいあなた。こんなむごいことはおやめください」

「大気の女神よ、そなたが大地の女神のもとを去り、わたしとともに暮らすなら、大地を焼くのはよすでしょう。そのちっぽけな生き物どもから目を背け、わたしだけを愛するなら、二度と大地には手を出さぬ」

頑固に言い募る太陽の神に、大気の女神は訴えた。

「あなたとともに暮らせば、熱さでわたしの身は焼かれ、消えてなくなってしまいます。あなたはそれでもよろしいのですか」

「そなたがわたしを避けるのは熱さのゆえか。それともわたしを厭うているのか」

「あなたはわたしの最愛の夫。どうして厭うことなどできましょう。ただ、ともに住むには熱すぎるのです」

「では、わたしの炎を遮る厚き衣を授けよう。それならともに住めるであろう？」

太陽の神は厚き衣を作って妻に与え、大気の女神はそれをまとった。

「さっきよりはましになりました。それでもやはり、ずっとともに住めば、暑さのためにわたしの身はやせ細り、やがては消えてなくなってしまいます」

「では、どうしろと言うのだ？」

「ともに住まずとも、こうしてお会いし、語り合うことはできましょう。一日のうち半分だけ、わたしたちは逢うことにいたしましょう。それならわたしも大地の生き物たちも、暑くなりすぎることはありません」

「離れて語りあうことしかできぬのか」

「熱き炎だけではなく、温かな光もまたあなたの一部。離れたところから、光だけをわたしに注いでくださいませ。そうすれば、わたしはあなたの愛に包まれ、あなたはわたしの愛を感じることができるでしょう」

太陽の神の心はやわらいだ。だがそれでも、言い募らずにはいられなかった。

「それでも、そなたと大地の女神が創ったあのつまらぬ生き物どもは、どうにも気に入らぬ」

「あなたが炎でなく温かき光を注がれるならば、彼らはあなたに感謝し、あなたを崇め奉ることでしょう。それでもご不快に思われますか」

太陽の神は、ためしに温かい光を地上に注いでみた。草や木にも獣や鳥にも人間にも、あらゆる生き物にとって、それは心地よいものだった。恐ろしい災いのときの後だけに、生き物たちは平和の訪れを喜び、穏やかな光を歓迎した。草や木や花は太陽の光にうっとりともどろみ、獣や鳥や魚は太陽の光に喜んで飛びはね、人間は太陽の神を崇めて賛歌を作った。

太陽の神は満足し、同時に、自らも生き物を創りたくなった。

「大気の女神よ、そなたは、大地の女神の仕事に力を貸した。わたしも生き物を創りたい。どうかわたしにも力を貸しておくれ」

「ええ、でもわたしたちは夫婦なのですもの。草木や獣や人のような生き物たちではなく、息子や娘を創りましょう。大地の女神とはまた違ったやり方で」

大気の女神は、太陽の神の光を抱きしめ、受け入れた。すると風の神々が生まれた。春風の女神、秋風の神、北風の神、南風の女神、夕風の神、夜風の女神、大風の神などであった。

太陽の神は今度こそほんとうに満足し、大地とそこに住む生き物たちは破滅を免れた。

こうして、草木や鳥や獣や人間たちは、大地の女神や大気の女神と同じぐらい太陽の神を崇拝するようになり、地上には風が吹くようになったのだった。

第三話 大風神殿

太陽の神と大気の女神は夫婦だった。大気の女神のかぐわしい体内に、太陽の神の光が矢のごとくふりそそぐと、女神は風の神々を産みおとす。

父神と母神の命は永遠だったが、子神たちは短命だった。そのかわり、風の神々は死してもまた生まれ変わった。神々といえども、生まれ変わるときには前世の記憶を失い、赤子同然の心で生まれてくるのだが、それでも前世と同じ容姿、同じ性質を持っているゆえ、親神たちは風たちの死を毎回それほど嘆かずにすんでいた。

風の神々のうちで、もっとも雄々しく猛々しいのは大風の神だった。やさしい春風の女神はやわらかな声で大風の神を賛美した。つかのまの命しか持たぬ美しくはかなげな夕風の神は、たくましい兄神にあこがれの目を向けた。ほかの兄弟姉妹の神々も、大風の神を崇拜し、あるいは畏怖していた。

大風の神は、生まれてこのかた地上に降りたことがなかった。母なる大気の女神がいやがるゆえであった。

だが、地上に降りた春風の女神はうららかな春の情景を語り、秋風の神はものさびしげな秋の風景を語った。北風の神は雪原の中で生きる人々について語り、南風の女神は常夏の地に生きる情熱的な人々について語った。夕風の神や夜風の女神は、はかない命しか持たぬゆえに語ることは少なかったが、それでも、短い生涯のほとんどを地上で過ごすことに満足しているようだった。

そんな兄弟姉妹の神々のさまを見て、大風の神は地上への好奇心を抑えがたくなり、あるときついに、天より下ろうと決心した。

「大風の神よ。どうか地上に降りるのはやめておくれ」 大気の女神が懇願した。

「母上、どうしてそんなに反対なさるのです？ 兄弟の神や姉妹の女神たちは、みんな地上に降りていくではありませんか。母上はそれに反対なさったことはない。どうしてわたしに限って天上に引き止めたがるのですか」

「それは、大風の神、そなたが地上に降りれば大地の上に大風が吹きます。大地に住む生き物たちはそなたを恐れています」

いつもならここで、大風の神は引き下がるのだが、今回はいつになく執拗だった。

「だからどうだというのです？ 北風の神が地上に降りれば寒すぎる風が吹くし、南風の女神が地上に降りれば暑すぎる風が吹く。どちらも地上の生き物たちに好かれているわけではないのでしょうか？ それでも母上は、彼らが地上に降りることに反対なさらないではありませんか」

「大風の神、そなたの場合は特別なのです」

「どうしてですか。大風が吹いたからといって、地上の生き物たちが死に絶えるわけではない。だいいち、わたしたちはみな、大地の上を吹きすぎるために生まれたようなものではありませんか。天上にずっと留まるのは、わたしの持って生まれた性質に反しています」

「いとしい息子よ、そなたにとって、地上はきわめて危険なのですよ」

母神の思いがけない言葉に、大風の神は驚き、腹を立てた。

「危険ですって？ 兄弟姉妹のだれよりも強いこのわたしが？ 春風の女神や夕風の神、夜風の女神などは、わたしよりはるかに弱いけれど、平気で降りていくではありませんか」

「そなたにとって特別に危険なのです。お願いだから、このまま天上にいておくれ」

「いいえ、そうと聞いては、なおさら行かずにはおれません。兄弟姉妹のうちでわたしだけが危険を恐れて天上に留まるなど、わたしの誇りが許しません」

大風の神の言葉に、大気の女神はついに折れた。

「そなたは何度生まれ変わっても、同じことを言うのですね。それほどまでに言うのなら、もう止めはしませぬ。そのかわり、これだけは忘れないでくれ。そなたは大風の神。ゆえに大風の吹けぬ場所では生きられぬ。それに、人間の住処には近づかないで。とくに神殿には絶対に近づいてはなりません」

「どうしてですか」

「理由は言えません。地上の生き物たちの行いによけいな手出しをしないと、大地の女神と誓約を交わしているのです。だから、何も聞かずに約束しておくれ」

「わかりました、母上。約束します」

そうして大風の神は地上に降りていった。

最初のうち、大風の神は、母女神との約束どおり、人間の住む場所には近寄らなかった。無人の島々や砂漠、荒野ばかりを選んで旅した。だが、すぐに飽きて、人里をのぞいてみたくなった。

「たしかに母上は、人の住処に近づくなとおっしゃった。だが母上は心配性なのだ。言われるままに人の住処を避けたりしては、まるでわたしが臆病者のようではないか」

そこで大風の神は、人間の住む町へと向かった。

大風の神は、人間の目にはたくましく美しい若者の姿と映った。だが、その若者が近づくとともに大風が吹きはじめたゆえ、大風の神であることはすぐに知れた。

人々は恐れて家にひきこもり、美しい少年少女の一団だけが大風の神に近づいてきた。なかでもひときわ美しい少女が、大風の神の前に進み出ると、深々とおじぎして奏上する。

「大風の神さま、お待ち申しておりました」

歓迎の言葉に、大風の神は驚いた。人間は大風をきらっているのではなかったか。

「そなたたちは何者か？」

「あなたさまのしもべにございます」

「わたしのしもべ？」

「はい。わたしはしもべの長、イーベと申します。どうぞお見知りおきくださいませ」

イーベは大風の神に手を差しのべ、崇拝に満ちた瞳で神を見つめた。

「宴の用意ができております。どうぞいらせられませ」

イーベに手を取られ、少年少女たちに取り巻かれて、大風の神は導かれるままについていった。

一団は町を出て、荒野へと出ていく。

「いったいどこに連れていく気だ？」

「風の神さま方をお祭りする神殿にございます」

「神殿だと。神殿にだけは近づくなと、母上に言われてきたのだが」

「まあ、なぜでございませうか。あなたさま方を崇め敬う場所でございますのに」

大風の神を見上げるイーベの瞳は無邪気そのもの。一片の悪意も認められない。

「その神殿は遠いのか」

「さほど遠くはありません」

そうするうちに、民家ほどの大きさの石造りの建物が見えてきた。

「あれがそうか？」

「ええ、あれも神殿のひとつ。ですが、春風の女神さまをお祭りする春風神殿にございます」

春風神殿の向こうにも、同じような小さな神殿がある。

「では、あれか？」

「あれは北風の神さまをお祭りする北風神殿にございます」

北風神殿の向こうにもまた小さな神殿があり、その向こうにも同じような神殿があった。そこかしこに小さな神殿が点在していたが、いずれも大風の神の神殿ではなかった。

「わたしの神殿はどこにあるのだ？」

「いちばん奥にあるのです。もうすぐ見えてまいります」

まもなく行く手に、今までの神殿のどれよりも大きな神殿が見えてきた。

「大風の神さま、あれがあなたさまをお祭りする大風神殿でございます」

他の神殿の倍以上の高さ。倍以上の間口。使われている石材はどの神殿よりも白く美しく、石壁の浮き彫りはどの神殿のものよりも手が込み、豪華だった。そして、かたく扉の閉ざされた他の神殿とは違い、扉が左右に開かれている。

「ずいぶんりっぱな神殿ではないか」

「あなたさまは、風の神さま方の中でもとりわけ偉大なお方であらせられますゆえ」

神殿の中には、数々の料理が並び、宴の準備がなされていた。

大風の神はイーベに導かれていちばん奥の席につき、そのすぐ右隣にイーベが座した。

「大風の神さま、あなたさまのしもべの中にお気に召したる者があらば、そちらに座らせておもてなしさせましょう。わたくしよりもお気に召したる者があらば、この席を替わりましておもてなしさせましょう」

「わたしはそちが気に入っておるゆえ、そこにおるがよい。他の者もみな同じように気に入っておるゆえ、だれでもわたしの左の席にくるがよい」

大風の神はおおらかで公平な性質であったから、崇拜の目を向ける少年少女たちをだれひとりとして拒むつもりはなかった。まして、見目よい少年少女たちばかりとあらば、なおのこと。大風の神はしもべたる少年少女たちを等しく気に入り、彼らの奉仕を等しく受け入れた。

イーベをはじめとする美しいしもべたちは、大風の神に酒を注ぎ、料理を勧めた。ある者は神のために歌い、ある者は踊って見せた。大風の神は大いに楽しみ、満足した。

大風の神が酒に心地よく酔い、満腹して眠気をもよおしかけたころ、しもべの少年少女たちは踊りながらさりげなく戸口に移動していった。大風の神がふと気がつくとき、それまでかたわらに侍っていたしもべたちは、いつのまにかひとり残らず踊り手たちの中に加わっている。ずっと神の隣にいたイーベまでが、踊り手たちの最後になり、戸口に向かって遠ざかっていく。

異変を悟って、大風の神は立ち上がった。しもべたちは踊りながら次々と神殿の外に出て行き、神は戸口へと走り急いだ。

神殿の扉は左右からゆっくりと閉まりはじめ、最後にイーベが踊り出ようとする。そのイーベの右腕を、ついに追いついた神が捕らえた。

イーベは狼狽し、ためらった。が、それは瞬きするほどのあいだのことだった。大風の神のしもべに選ばれし者として、扉が閉ざされる前に神に引き止められたときの心得を、イーベはよく言い聞かされていた。大風の神を祭る宴の終わりに、しもべが神に引き止められることは、ごくまれなこととはいえ、これが初めてではなかったのだ。

かねて教えられていたとおり、イーベは大風の神の胸に飛び込んだ。まるで恋人の胸に飛び込む乙女のように。

だが、イーベには思いもよらぬことだったが、大風の神は、なにも彼女を引き止めようとしたわけではなかった。少女を捕まえれば、扉は閉ざされぬと思ったのだ。

そんな思惑に反して、少女に体当りされたいきおいで思わず足を止めた大風の神の目の前で、神殿の扉は閉ざされた。

大風の神はイーベを突き飛ばし、扉を押し開けようとした。だが、扉はかたく閉ざされ、たくましい大

風の神の力をもってしても開かない。渾身の力で押しつづけているうちに、いつしか大風の神は力が萎え、その場に膝をつき、ついに扉を背にして座り込んだ。

力が萎えたのは、扉を押し疲れたためだけではなく、真に神の力が抜け落ち弱まっていた。

大風の神は大風の吹けぬ場所では生きられぬ。大気の女神の警告を、大風の神は思い出した。閉ざされた室内では大風など吹けるはずはなく、大風の神の命は尽きようとしていたのだ。

力なく座る大風の神のかたわらに、イーベはそっと身をかがめ、声をかけた。

「お席に戻れますか」

「よくもだましたな」

うなるような神の声に、イーベはとまどい、ためらいがちに神の機嫌を取ろうとした。

「お酒をお持ちしましょうか？ それとも、くだものでも？」

何とたずねても神は不快感で、イーベは困惑した。神のこんな反応は予期していなかった。神は宴にいたく満足し、大いに楽しんでいたようなのに、どうして今はこんなに不快感なのか。大風の神のおかれた状況を、イーベはまったく理解していなかった。

大風の神には満足していただかねばならぬ。お祭り申し上げねばならぬ。ゆえに、もしも宴の終わりに神に引き止められたならば、神が満足なさるよう、さらに心を込めて接待申し上げるように。イーベはそう教えられていたのだが、どこやら悲しげな神の姿を見ると、宴のときとは勝手が違う。どうしていいのかわからず、イーベはただじっと神を見つめた。

たいまつのみりの中で、大風の神は美しかった。宴の席で豪放に笑いころげる姿も美しかったが、無言で目の前の少女を見上げる姿には、また別の美しさがあった。とりわけ、神の瞳の強い輝きにイーベは魅せられた。手負いの猛獣が獵師に向けるのとよく似た瞳だったのだが、そんな連想はイーベの頭には浮かばなかった。

大風の神の澄んだ瞳に魅せられて、イーベは、神を満足させるすべを悟った。少なくとも本人はそう信じた。

イーベは立ち上がると、装身具をはずし、衣の肩紐と飾り帯を解いた。衣がするりと少女の足元にすべり落ちる。

宴のときならば、大風の神は、明りにほのかに浮かび上がる少女の裸身を、あるいは美しいと思ったやも知れぬ。だが今は、獵師に向ける傷ついた猛獣のごとき瞳でイーベを見上げるばかりだった。

イーベは大風の神のかたわらに膝をつき、神の胸の上によりかかった。神はたくましい腕をたおやかな少女の背にまわした。

大風の神につねの力が残っていたなら、怒りのあまり少女のか細い胴を締め、背骨をへし折っていたに違いない。事実、そうして命を落としたしもべの少女が過去にひとりならずいたのだが、それはイーベの知るよしもないことだった。

イーベにとっては幸運なこと、大風の神にとっては不幸なことに、神にはもはや、少女の体をへし折るだけの力は残っておらず、ただきつく抱きしめるだけに終わってしまった。

先ほどのようにつき飛ばされず、抱きしめられたことに、イーベは安堵した。しもべの行為を神が喜んでいるのだと、完全に誤解していた。

ほどなくして、神の腕の力が抜け、両のまぶたが閉ざされた。神は満足して安らいでいるのだと、イーベは信じて疑わなかった。神の命が尽きかけようとしていることを知らぬがゆえであったが、仮に知ったとしても、同じことであつたらう。

大風の神は、またいつか帰ってくる。神自身にすればそれはまた別の生涯であるのだが、人間の目から見れば不死と同じことだった。

まもなく神の命は尽き、大気の中に溶け込み消えていった。ひとり残されたイーベは、ふたたび衣を身につけると、扉ごしに呼びかけた。

「神官さま。どなたかそこにおられますか」

扉の向こうから返事があった。

「イーベや、大風の神さまはお戻りになられたか」

「はい。お戻りになりました」

扉が開かれ、大風神殿の神官たちと神鎮めのしもべを務めた少年少女たちが、しもべの長を務めた少女を出迎えた。

イーベは神官におじぎをすると、正式に報告した。

「大風の神さまは祭に満足なされ、滞りなく天にお戻りになられましてございます」

イーベの表情はこのうえなく晴れやかで誇らしげだった。神鎮めのしもべを滞りなく務めるのは、年ごろの少年少女たちにとっては名誉なことであり、しもべの長を務めおおせるのはさらなる名誉。そのうえ、大風の神に気に入られて引き止められたのは、最高の榮譽であった。

大任を終えた少女を祝福しねぎらう人々の上に、小雨が降りだした。大風の神を祭った後には、なぜかいつも小雨が降る。

人間たちには知るよしもなかったが、それは大気の女神の涙だった。大風の神より命短い風の神はいくらかあったが、自然の寿命を待たずに命を落とすのは大風の神ぐらいのもの。ゆえに、大気の女神は嘆かずにはいられない。とはいえ、嘆きは一時のこと。大風の神はすぐにまた生まれてくる。そうしてまた、人間たちの祭に誘われ、命を終えることだろう。

第4話 木星の野望と月の誕生

地上に人が住みはじめてまもないころ、空には月がなかった。月の女神がいなかったからである。月の女神が生まれ、夜空に月が輝くようになったのは、次のようなゆえからだ。

星の神々の中でもっとも力が強くたくましいのは、木星の神だった。木星の神はそれが自慢で、星の神々のうちで自分がもっとも優れていると、つねに口癖のように言っていた。

だが、誇り高い星の神々は、木星の神の力を認めはしても、ことさら敬意を示すようなことはしなかった。ことに、火星の女神、知星の女神、大地の女神はそうであった。

三人の女神に対する不快さを、あるとき木星の神は、金星の女神の前で口にした。
「火星の女神は気に食わぬ。どうしてこんなに、何かにつけてわたしにたてつくのか」
「ええ、ほんとうに困った方」金星の女神は微笑んだ。

「あなたの方が強いから妬んでいるのですわ」

木星の神は満足した。美しくはなやかな金星の女神は、いつも心地よい言葉をささやいて、よい気分にしてくれる。彼女は星の神々のなかで、木星の神のいちばんのお気に入りだった。

「知星の女神は気に食わぬ。賢しげで生意気だ。力が弱いくせに、このわたしを見下したような目を見る」
「皆が言うほど賢い方ではありませんわ。あなたのような強い方を怒らせているのですもの」

木星の神は満足してうなずいた。
「それに、大地の女神も気に食わぬ。大気の女神を引き止めて放さぬ。大気の女神はわたしの妻にしようと思っていたのに」

「でも、大気の女神は太陽の神の妻ですわ」

金星の女神ははじめて言い返した。
「大地の女神と生き物たちがどんなふうにも太陽の神の怒りを買ったか、ごらんになったでしょう？ ただの女友だちや創造物でさえ、あれほどの怒りを買うのですもの。奪って自分の妻になどなざったら、どんな恐ろしいことになるかしれませんわ」

木星の神は腹を立てた。
「どうしてそんなに太陽の神を恐れるのか。生意気な火星の女神や知星の女神などでさえ、太陽の神には敬意を払う」

「あなたは、わたしたち星の神々の中でも、もっとも強いお方。でも、太陽の神は別格ですわ。わたしたちをお創りになった方ですもの」

「どうして別格なことがあるものか。太陽の神もわれわれも、同じように創始の宇宙卵の殻より生まれし者。たとえ創り主でもそれは同じはず」

「でも、太陽の神はわたしたちのだれよりも強い力を持っています。きっと、もともになった殻の大きさが違ったのでしょう。そうだわ、それなら……」

金星の女神は、ふとひらめいた思いつきを口にした。
「宇宙の卵の殻をたくさん集めて、自分の体の一部にしてしまえばいいのです。そうしたらきっと、太陽の神と同じように、いえ、もっと強くだってなれますわ」

気まぐれな金星の女神は、この思いつきに夢中になった。
「ねえ、ぜひおやりになって。おもしろそうじゃありませんの」

すっかりその気になった木星の神は、さっそく宇宙卵の殻の破片を集めはじめた。そのようすを見て、知星の女神は不審に思った。

「木星の神よ、そんなものを集めてどうするのですか」

「わたしの体の一部にして、もっと強い力を手に入れる。太陽の神と同じ、いや、それ以上の力をな」

「なんてばかなことを」

知星の女神は驚いて反対した。

「そんなことをしたら、太陽の神がふたりになるのと同じこと。世界が熱くなりすぎてしまいます。あなたの力は、今でもじゅうぶん強いじゃありませんか。どうしてそれ以上強くなる必要があるのです？」

「そうとも。今でも強いとも。だがおまえたちは、わたしを敬いもしなければ、畏れもしない。だから、もっと強い力が必要なのだ」

「わたしたちはみんな、あなたの力をたいしたものだと思っています。どうしてそれではいけないの？」

「おまえたちはわたしに従いはしない。そうして逆らうではないか」

「どうして従うことを求めるのですか。同じ星の神どうし。どうして対等であっては満足できないのですか」

「同じではない。わたしの方がはるかに強い。今からもっと強くなる」

木星の神は、宇宙卵の殻のかけらを一つつまみ上げると、口に入れて飲み込んだ。すると、木星の神の体は少し大きく、少し熱く、少しまばゆくなった。

「おやめなさい。世界を焼きつくしたいのですか」

知星の女神の制止を木星の神は聞き入れない。一つ、また一つと宇宙卵の殻のかけらを飲み込み、そのたびに世界は熱くなっていく。

木星の神がひととき大きなかけらをつまみ上げたとき、知星の女神はたまりかね、木星の神の手からそのかけらを奪い取った。

「何をする！ 返せ！」

木星の神が取り返そうとするよりも早く、知星の女神は手にしたかけらを放り投げた。すると、そのかけらは彗星の女神となり、木星の神の怒りように恐れをなして逃げ去っていく。

木星の神は怒り狂い、知星の女神につかみかかると、怒りにまかせて女神の体を引き裂いた。

断末魔の悲鳴を残して引き裂かれた女神の亡骸を前に、木星の神はわれに返った。木星の神は乱暴な性質ではあったが、今までこれほど残虐な行ないをしたことはなく、たちまち後悔の念に満たされた。

知星の女神の悲鳴を聞いて、他の神々も驚いて駆けつけ、そのむごたらしいありさまに怒り悲しんだ。火星の女神と海星の神は木星の神に詰め寄り、大地の女神と大気の女神は友の亡骸をかき抱いて悲しみにくれた。水星の女神と金星の女神は恐ろしさに打ち震え、土星の神と天星の神は、最高の英知が失われたことを惜しみ悼んだ。

太陽の神の怒りと嘆きは星の神々以上だった。木星の神から残った宇宙卵の殻を取り上げると、怒りのあまり打ち殺そうとする。それを止めたのは大地の女神の声だった。

「太陽の神よ、知星の女神は生きています」

木星の神をかばったわけではない。事実であった。

「心臓がかすかに動いていますもの。太陽の神、あなたなら、生き返らせることがおできになるのではありませんか」

太陽の神は引き裂かれた女神に手を延ばし、ずたずたに裂かれた体から心臓を取り出した。完全には死んでいなかった心臓は、太陽の神の手の上で命を取り戻し、知星の女神の姿に変貌していく。

まもなく太陽の神の手の上には、以前とまったく変わらぬ知星の女神の姿がよみがえり、以前とまったく変わらぬ英知にあふれた瞳あたりを見まわした。ただ、女神の大きさだけはかつての心臓と同じだった。

「何が起こったのです？ みんなそんなに大きくなって」

だが、すぐに、聡明な女神は、皆が大きくなったのではなく、自分が小さくなったのだと気がついた。そうして、かつて自分のものであった亡骸を見て、すべてを理解した。

「木星の神をどう罰するべきだと思うか」

太陽の神が、甦った女神に問いかけた。

「二度とこんなことをしないと誓わせるべきでしょう」

「わたしは彼を殺そうと思った。非道な罪の償いのために」

「わたくしたちはだれひとりとして失われるべきではありません。それよりも……」

知星の女神は自分の亡骸をふり返った。

「あれをそのままにしておきたくはありません」

そこで太陽の神は、裂かれた亡骸の左半分から冥星の女神を、右半分から月の女神を創り、その場に流された女神の血から小星の女神たちを創った。

こうして星の神々には新たに仲間が加わり、夜空には月が輝くようになったのである。

第五話 夕風の恋人

世界に風の神々は数多いが、夕風の神ほど美しい神は他にはおらぬ。夕風の神ほど命はかない神もまたおらぬ。

陽が傾き、空が紅に染まりかけるころ、夕風の神は生を受ける。そうして夕暮れのひとときを生き、あたりが闇にとざされるころ、そのはかない生涯を終える。だが、次の日、空が赤く染まるころ、夕風の神はまた生まれてくる。

前日とまったく同じ夕闇の色の髪。美女とみまごうはかなげな面差しも夕闇の色の瞳も同じなら、夕闇の色の衣も同じ。性質もしぐさもまた同じ。だが、前日の記憶を持ってはおらぬ。ただ、本能のごとく、自分が夕風の神であり、夕方しか生きられぬことを知っている。それは、前の日に生きた夕風の神と同じ神とも言えたし、また別の神とも言えた。

夕風の神は生まれ落ちるとすぐに地上に降りる。兄や姉の神々とつかのま語らうことはあっても、長くともにいることはない。

地上を歩く夕風の神の姿は、夕闇に溶け込みそうないでたちにひそやかな物腰ながら、ただの旅人とは見えぬ神秘的な雰囲気ゆえに人目を引いた。ある者は幻かと目をこすり、ある者は人ならぬ存在と悟って近づくのをはばかった。

だが、ごくまれに、炎に惹かれる蛾のごとく、神の美貌に惹かれて近づく者もいた。フィゼルもそんなひとりであった。

フィゼルは好奇心が強くて大胆な娘で、夕風の神をひとめ見ると、目をそらすことができなくなかった。こんな美しい若者をいちどとして見たことがない。村の若者にはだれにも惹かれたことのないフィゼルだったが、夕風の神にはひとめで恋におちた。

「どちらへ行かれますの？」

フィゼルの問いに、夕風の神はまっすぐ前方を指差した。

「あちらへ」

「行く先を聞いていますのよ。どちらの村へ行かれますの？」

「さあ」

夕風の神は首をかしげた。ほんとうに知らなかったからだ。

「行けるところまで」

「お急ぎですか？」

「いいや」

「では、わたしといっしょにきてくださいますか」

フィゼルは手をさしのべ、夕風の神はその手を取った。何も尋ねなければ、ためらいもせぬ。ひよこが親鳥について歩くように、神は娘についていった。

娘は野を横切り、林を抜け、小さな湖の畔にと神をいざなった。

「お名前は何かとおっしゃいます？」

「夕風の神」

フィゼルは笑った。本気にしてはいなかった。

「大胆な方ね。神さまに叱られますわよ」

夕風の神は、フィゼルの言っている意味がわからなかった。ただ、娘が楽しそうに笑っているのを見てまねをした。

フィゼルは、この美しい若者がますます気に入った。神を冗談の種にするとは、小心な村の若者たちとはなんという違いだろう。

娘は草の上に腰をおろし、隣にすわるよう、若者を促した。美しい若者の顔をほれほれと眺めると、夕闇の色の髪に手をのばす。

「ふしぎな色の髪ね。こんな髪の人、見たことないわ」

小さな子供が親の真似をするように、夕風の神はフィゼルの真似をして、娘の茶色の髪に手をのばした。フィゼルが夕闇色の髪をなでると、神も娘の髪をなで、娘が手にした髪に口づけると、神も同じようにした。

フィゼルは夕闇色の髪から手を離し、神の白い頬に触れた。神も真似をして、娘の頬に焼けた頬に触れる。

「あなたの肌はずいぶん白いのね」

夕闇に消え入りそうなほど繊細な輪郭をいとおしげになぞりながら、フィゼルが言った。

「それに、亦ちゃんの肌より柔らかくてきれいだわ。まるで、真昼の太陽に焼かれたことがないみたい」

「真昼は知らない。太陽はわたしの父なのだが」

よく意味のわからない冗談だと思いながらも、最高神たる太陽をも恐れぬ若者の大胆さが好ましくて、フィゼルは微笑んだ。それを見て、神も微笑を返す。

美しい微笑に引き込まれるように、フィゼルは腰を浮かせて顔を近づけ、色素の薄い唇の上に口づけした。しばらくそうしてから身を放し、美しい顔に怒りやとまどいが浮かんではいまいかと、おそるおそるのぞきこんだ。

神にはフィゼルの行為の意味はまったくわからなかったが、今までと同じように真似をした。顔を近づけて唇を重ねると、娘の顔をのぞきこむ。

真似をしてみせただけだとは、フィゼルには思いもよらぬ。相手も積極的なことに勇気づけられて、フィゼルは神の白い手を取り、自分の胸元、衣服の下へと導いた。夕風の神は、フィゼルに導かれるまま、草の上に娘と折り重なるように横たわり、彼女が望むとおりのことをした。神にはわけのわからぬことだったが、気にしてはいなかった。

それからどのぐらい、抱き合ったまま横たわっていたらうか。幸福に酔いしれ、まどろんでいたフィゼルは、ふと肌寒さを感じて目を覚ました。いつのまにか日はとつぷりと暮れ、美しい恋人の姿はどこにも見当たらず。

「薄情な方。黙っていっておしまいになるなんて」

夜の訪れとともに神の命が絶え、夜闇の中に消えていったことなど、フィゼルが知ろうはずはない。恋人の冷たさを思って、フィゼルは泣いた。

そのあと長いあいだ、夕風の神がフィゼルの村の近くを通りかかることはなかった。夕風の神が地上に降り立つ場所は決まっておらず、歩く道筋も決まっていないゆえ、広い地上でたまたま同じ場所を通りかかるということは、そうしょっちゅうあることではなかったのだ。

毎夕生まれ変わる夕風の神は、むろんフィゼルのことなど覚えてはおらぬ。フィゼルのひとときの恋人であった夕風の神と、新たに生まれ変わった夕風の神とでは、同じ神にして別の生を持つ別の神でもあったのだから、当然のことだった。

だが、フィゼルのほうは、ひとときの恋人であった美しい若者のことを忘れることができなかった。村の男たちからの求愛はすべてはねつけ、夕刻になると、かの美しい人がふたたび通りかからぬものかと、かつて恋人と出会った村はずれをさまよい歩いたり、湖の畔にたたずんだりした。

そうして何日、何十日が過ぎたらうか。ある日、フィゼルは、ふたたび恋しい人の姿を目にした。前と同じ夕闇色の髪に夕闇色の衣。だが、声をかけることはできなかった。顔なじみの村娘が、かの人の腕に自

分の腕をからませ、べったり寄りそって歩いていたからだ。

ふたりはフィゼルのすぐ前を通りすぎた。フィゼルの姿に気づいた娘は、誇らしそうな笑顔を向けると、ますますべったりと連れの腕に寄りかかった。

夕風の神もフィゼルの方をゆっくりとふり返る。美しい面がこちらを向くのを、フィゼルは期待を込めて見守った。

(わたしを見て。そうしたら、こんな娘なんて放りだして、わたしの方に来てくれるわね)

だが、フィゼルの期待は裏切られた。ふり向いたかつての恋人の表情には、再会の喜びも、驚きも、他の娘に目移りしたうしろめたさも認められなかった。ただ、行きずりの見知らぬ人に向けるような視線を投げかけただけだった。

最悪の反応に、フィゼルは凍りつき、茫然とふたりを見送った。

それからフィゼルは、何度か夕風の神の姿を見かけた。かつての恋人は、たいていどれかといっしょだった。娘のこともあれば、若者のこともあった。もっと年のいった男や女のこともあった。べたべた寄り添っている者もいたし、つつましくやかに隣を歩いている者もいた。

夕風の神と出会うたび、フィゼルの胸は高鳴ったが、もういちど話しかけようとは思わなかった。彼がひとりであるときでさえ、話しかける気にはなれなかった。

かつての恋人は、そしらぬふりをするぐらいならまだしも、まったく彼女のことを覚えていないように見える。そんな冷淡な男に泣いてすがったり怒ったりするのは、彼女の誇りが許さなかった。

だが、ある日の夕暮れ、ついにフィゼルの憤りは頂点に達した。よりによって、かつてふたりで過ごした思い出の湖の畔で、夕闇色の髪の良い若者が村の若者ととも横たわり、かつてフィゼルにしたのと同じようなことをしているのを目にすると、見て見ぬふりはできなくなった。

フィゼルが息を詰めて見つめていると、やがてふたりは並んで横たわったまま動かなくなった。フィゼルはふたりに近寄った。村の若者は寝息を立てていたが、夕闇色の髪の良い若者は眠ってはいなかった。

夕風の神は身を起こし、フィゼルを見つめた。繊細な面立ちと神秘的な夕闇の瞳の美しさは記憶にある以上だった。思うさま罵り、頬の一つもぶってやろうと、怒りにまかせて近づいたフィゼルだが、いざ間近になると、罵りの言葉は声にはならなかった。目の前の若者はあまりに美しすぎ、神秘的すぎて、いかなる罵倒の言葉も似つかわしくないように思え、怒りさえもが萎えしぼんだ。罵りの代わりに、自分でも思ってもいなかった言葉が口をついて出た。

「わたしは美しい？」

「美しい」

ためらうことなく、夕風の神は答えた。

とはいえ、夕風の神は、フィゼルの意味するところをほんとうに理解したわけではない。ひとときの命しか持たず、ひとときの記憶しか持たぬ夕風の神には、その短い生のあいだに出会う人間の数は限られている。ゆえに、人間の美醜の規準を知らぬ。まして、神に人間の美醜はたいして意味を持たなかった。

だが、夕風の神は、短いゆえに己れの生を愛していた。短い生のあいだに出会うすべてのものを愛していた。そして、傍らに眠っている最初に出会った人間は、夕風の神を美しいと誉めたたえ、幸福そうに微笑んだ。ゆえに神は、幸せなことを人間は「美しい」と表現するのだらうと思っていたのである。

「わたしを愛している？」フィゼルがさらにたずねた。

「愛している」

彼女がたずねたのと同じ意味においてではなかったが、べつに偽りではなかった。

「では、その人は？」フィゼルは、神の傍らに眠る若者を指さした。

「愛していない？」

「愛している」娘の問いの真の意味がわからぬまま、神は答えた。

フィゼルは顔を赤らめた。怒りよりもむしろ、屈辱のゆえだった。

「わたしよりも？」

意味がわからず、神は首をかしげた。

娘はますます顔を赤らめ、衝動的に衣をその場に脱ぎ捨てた。

「このわたしとその人と、同じほどの魅力しかないの？ わたしの方が美しいとは思わないの？」

黄昏のおぼろな光の中に均整のとれた裸身を惜しげもなくさらし、フィゼルは神の手をとった。

「ほんとうに覚えていないの？ わたしのことを？」

フィゼルは神の手をおのが唇にあて、それから胸のふくらみに押しあてた。

「ここでわたしと過ごしたことも？」

娘の言うことは神には理解できなかったが、望むところは理解した。きょう生まれて最初に出会った人間とのかかわりから、夕風の神は、人間が神に求めるものを、彼なりにわかったとっていた。

そこで、夕風の神は、フィゼルを抱き寄せ、先に出会った若者にしたのと同じことをした。

その物音で、眠っていた村の若者が目を覚ました。目の前に繰り広げられる光景に、若者は驚き、つづいて腹を立てた。

若者とフィゼルは互いに罵りあい、どちらを選ぶのかと、夕風の神に詰め寄った。

そうしているうちにも、太陽は地平線の下へと沈んでいく。夕風の神は、短い夕刻の終わりを悟って静かに目を閉じた。

太陽が完全に没し、最後の光が失われるとき、夕風の神はその場にくずおれた。驚いて抱きとめた若者と娘の腕のなかで、神は、闇の中に溶け込むようにして消え去った。

フィゼルと若者は、茫然とその場に立ちつくした。日が沈んだとはいえ、月明りで間近のものなら見える。美しい恋人が、どこかへ立ち去ったのではなく、ほんとうにかき消えたことははっきりしていた。

そうして、そのときになってはじめて、恋仇の男女は悟ったのだった。自分たちの争いの的であった美しい恋人は、ほんとうに神、夕風の神だったのだ、と。

それからほどなく、若者とフィゼルは結婚した。あの夜、ふたりが愕然と立ちつくしているときにたまたま通りかかった村人が、ふたりの仲を誤解して、村の噂になったゆえでもあったし、互いに、美しい恋人のことを忘れたいがゆえでもあった。

まもなく、ふたりのあいだに男の子が生まれた。茶色の髪と茶色の瞳は母親譲りだったが、はかなげで美しい顔立ちは、父親にも母親にも似ていなかった。成長していくにつれ、ますますそれがはっきりしていった。

この子は道で目にした美しい旅人に似ている。村人たちの中に、そう言いだす者がいた。不義の子、といっとき噂が流れたが、すぐに立ち消えた。興味本位の噂など、このやさしく美しい子供には似つかわしくない。村人すべてにそう思わせるものが、少年にはあった。

そのうえ、よくない噂を否定するかのよう、少年の父親はこよなく息子を愛していた。母親は言うまでもなかった。夫婦は掌中の玉のように息子を慈しみ、息子が遊びに熱中するあまり日が暮れても帰らないことでもあれば、はたで見ているおかしいほどに心配した。

村人の幾人かは、息子が闇の中に溶けて消えるとでも思っているのかと、失笑した。ほんとうに両親がその通りのことを恐れているのだと、わかるはずはなかった。一家の仲むつまじさを、村人たちはうらやみ、ほほえましく思っていた。仲のよい父子、仲のよい母子、仲のよい夫婦。たしかにその通りであったから、美しい少年の両親の心の奥深く、つねの夫婦、つねの親とは異なる感情が秘められていることに気づいた村人は、ついにひとりもいなかった。

今はもう失われた民の神話

<http://p.booklog.jp/book/84234>

著者： other-world（立川みどり@アザー・ワールド）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/other-world/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84234>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84234>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ